

TOPIC

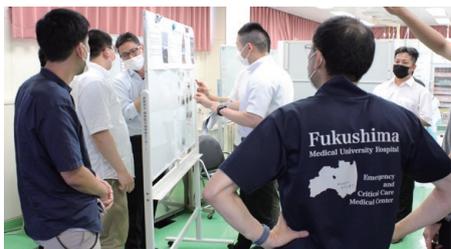
## 陸上自衛隊化学学校の学生らが 本学附属病院放射線災害医療センターを訪問

令和5年6月15日(木)、陸上自衛隊化学学校幹部上級課程(化学科)学生11名及び教官9名が、2011年の福島第一原子力発電所事故時の緊急被ばく医療及び他機関との連携の実相を体験学習するため、本学附属病院放射線災害医療センターを訪問されました。

研修は、机上演習、講義、現地視察の3部構成にて行われました。

冒頭で山下俊一副学長、吉澤隆夫一佐から挨拶を頂いたのち、学生は4つのグループに分かれて机上演習を行いました。そこでは病院と自衛隊の緊急被ばく医療における連携構築を目的に、福島第一原発から同時に多数の患者さんを受け入れるという想定で、ホワイトボード上の病院構内見取り図を用いながら、もし自分達が派遣されたらどのように部隊を展開するか、実際の活動を想定し検討を行いました。

続く講義では、実際に当院で福島第一原発から搬送された患者の診療にあたった長谷川有史主任教授(本学放射線災害医療学講座)が講師を務めました。そして、2011年当時の当院における実際の傷病者搬送の動線や自衛隊等との連携・活動について、写真や動画を交えて紹介を行いました。



その後の現地視察では、事故時に自衛隊とともに活動を行った放射線災害医療センター内の、線量評価機器(ホールボディカウンターや各種検知測定機器)、蘇生処置室や、大型ヘリ降機場となったグラウンド、傷病者収容施設に想定された体育館及びプールを徒歩で視察しました。

今回視察頂いた学生の皆さんは自衛隊特殊災害対応部隊の幹部候補生にあたります。彼らの中には東日本大震災当時高校生だった方もおられました。その後の反省会では、「原発

事故時の現場を視察し、当時の部隊の行動を追体験することで自衛隊と医療機関との連携について考える事ができた」「できれば全自衛隊員に同様の機会を設ける事ができれば有り難い」などの感想を頂きました。

最後に、原発事故当時の本学に駐屯いただいたことに対して改めて感謝の意を表しました。そして当時の困難な時間を共に過ごした双方が、それぞれの労をねぎらい合い、感謝と敬意の気持ちを交換して体験学習を終えました。



### INFORMATION

## 看護学部開設25周年記念企画のお知らせ

本学看護学部は、令和5年4月1日(土)をもって開設から25年を迎えました。看護学部は、平成10年4月1日に開設して以来、豊かな感性と高い倫理観を持ち、ニーズに対応しうる実践能力を備えた看護専門職者を輩出してまいりました。

学部開設25年の節目を迎え、これまでの学部の歩みを振り返りながら、これからの25年

の展望を語る企画として「学部開設から25年の歩み—臨床で見つけた実践と研究の種を育む—」を8月5日(土)に本学8号館3階N301講義室にて開催します。

参加費は無料で、お子様連れでの参加も可能です。たくさんの方のご参加をお待ちしておりますので、ご興味がある方は、右記より詳細を確認の上、お申し込みください。

詳細はこちら



申し込みはこちら



※申込締切は7月31日(月)まで



## 放射線医学県民健康管理センター長に 安村誠司理事兼副学長が就任

神谷研二氏におかれては、令和5年6月21日をもって、本学副学長(業務担当)兼放射線医学県民健康管理センター長を退任いたしました。

このことに伴い、安村誠司理事兼副学長(県民健康担当)、医学部公衆衛生学講座 教授が6月22日付で、同センターのセンター長に就任し、次のように今後の抱負を述べました。



平成23年の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故によ

り、県民健康調査の開始が決定され、本学は県の委託を受けて同年9月に放射線医学県民健康管理センターを開設しました。私はその時からセンターに関わり、県民健康調査の企画、実施評価、そして、県民への支援に携わってきました。

このたび、神谷前センター長の退任に伴い、竹之下誠一理事長から、県民健康調査の運営と県民への支援にしっかりと取り組むよう、指示を受け、センター長に指名されました。本調査の重要性をもっとよく知る一人であると自任

しており、全力で職務を全うしてまいります。今後の運営に当たり、次の2点を強調させていただきます。一つは、「適切な支援のために調査を行う」という県民健康調査の原点を確認すること、もう一つは、福島国際研究教育機構(F-REI)第5分野に積極的に関わり、情報発信に力を入れていくことです。

これらを実施するため、放射線影響研究所を始め、国内外の教育研究機関等との連携を強化していく必要があると考えており、皆様のこれまで以上のご支援ご協力を切に願います。

これらを実施するため、放射線影響研究所を始め、国内外の教育研究機関等との連携を強化していく必要があると考えており、皆様のこれまで以上のご支援ご協力を切に願います。

これらを実施するため、放射線影響研究所を始め、国内外の教育研究機関等との連携を強化していく必要があると考えており、皆様のこれまで以上のご支援ご協力を切に願います。



### SPECIAL THANKS

## 「早期ポリクリ」の病院見学実習を開催することができました



本学医療人育成・支援センターは、6月22日(木)、23日(金)に本学附属病院にて医学部1年生を対象とした「早期ポリクリ\*」の病院見学実習を3年ぶりにコロナ禍前の形態で実施しました。

この実習は、中央診療部門12か所の見学を1日、各病棟で医師や看護師の仕事のシャドウイングを1日、班ごとに行います。実習自体は、

どの医学部でも行われているものですが、本学のユニークな点は、中央診療部門見学の中に、直接診療に関わらない「バックヤード(焼却炉、中央監視室・ボイラー室、病歴室、物品供給センター)見学」があることです。

学生の実習レポートでは、患者さんからの感謝を直接受けづらいこれらの部門の方々が、患者さんのためによりよい診療環境を提供したいという強い目的意識と責任感をもって働いていらっしゃることに強い印象を受けたとの感想が寄せられます。

本実習が実施できるのは、非医療職を含む全ての職員が将来の医療のために学生教育を支えようという意思を共有していることを意味しています。しかも、見学に来た学生への対応

は、終始立ち通しで、班が変わるごとに25分間の説明を繰り返さなければならず、決して楽な仕事ではありません。

それにも関わらず、病歴部では本学職員が、焼却炉、中央監視室・ボイラー室、物品供給センターでは、委託業者の方々が、学生が興味を持ちやすいよう工夫して2日間説明してくださいました。

担当教員の医療人育成・支援センター亀岡弥生教授は、「早期ポリクリにご協力くださった全ての方々に御礼を申し上げるとともに、皆様の熱意がしっかりと学生の胸に届いていることをお伝えします」と実習を振り返り感謝を述べました。

\*早期ポリクリ:入学後間もない医学生に患者や医療職に接する機会を与える授業



### GEX e-NEWS

## マウントサイナイ医科大学 学生交流発表会を開催しました

令和5年6月12日(月)に本学11号館第2臨床講義室にて、マウントサイナイ医科大学学生交流発表会を開催しました。これは、本学とマウントサイナイ医科大学(アメリカ)が締結している学術交流協定(MOU)に基づく事業の一環として開催されたものです。

交流発表会では、マウントサイナイ医科大学に留学した本学医学部4年生の瀧本敬慎さんと

小池妃世莉さん、本学に留学中のマウントサイナイ医科大学医学部のPriya Singhさん、Stephanie Montesinoさんが発表を行いました。

瀧本さん、小池さんは心臓の移植手術を見学し、間近で最先端の移植手術を見ることができたなど、マウントサイナイ医科大学での体験や学びについて発表を行いました。



Priya Singhさん、Stephanie Montesinoさんは、本学に留学を決めた経緯や現在学習を進める災害医療について発表を行い、「放射線災害による差別や偏見は今でも大きな問題だと思います。福島の実状について真実を学び、アメリカに持ち帰り共有することが重要であると感じました」と福島で学ぶ意義を述べました。